

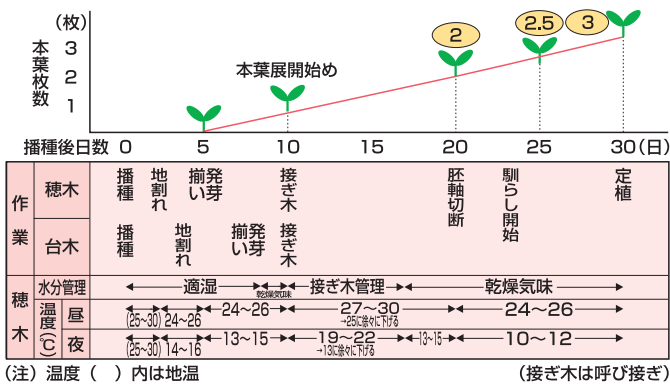
タキイのキュウリ栽培マニュアル

地域		月	4	5	6	7	8	9	10	11
露地	冷涼地		●	×	—	—	—	—	—	
	中間地	●	×	—	—	—	—	—	—	
	暖地 (露地抑制)			●	×	—	—	—	—	

適期表記号説明

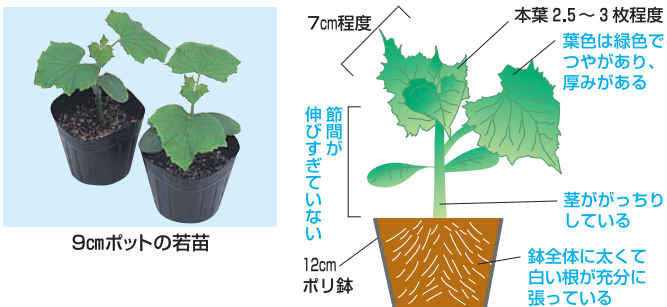
- : タネまき
- : 育苗期
- × : 定植
- : 生育期
- : 収穫期
- : 適宜播種可能

キュウリの育苗管理



キュウリの定植適期苗

タキイ品種は育苗日数約30日、本葉2.5~3枚程度の若苗定植で、活着がスムーズになり初期の生育を安定させることができます。畑の準備が遅れて老化苗定植にならないよう注意してください。



- キュウリの接ぎ木苗 (カボチャに接ぎ木)
- ブルーム台木…歯切れがよくおいしい
 - ブルームレス台木…ブルームが発生しないので、見た目がよい

①ブルームとは

ブルーム（果粉）は果実表面に現れる白い粉状の物質で、根からケイ酸（ SiO_2 ）を吸収することで発生します。ブルームは本来キュウリにある物質で、ブルームの発生する台木に接ぎ木したり、自根で栽培すれば、ブルームのついたキュウリが収穫できます。



①ブルームキュウリ ②ブルームレスキュウリ

②ブルームレスとは

日本種南瓜の一部に、特異的にケイ酸を吸収しない性質のものがおり、これに接ぎ木をするとロウ物質が生成されずその結果、ブルームのでないピカピカ光るブルームレスキュウリが収穫できます。

キュウリの定植

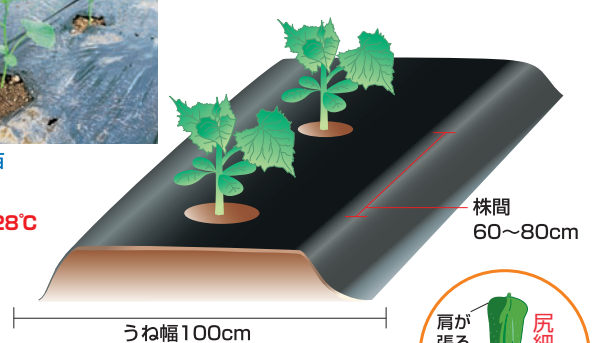
定植時期の目安は、晩霜の心配がなく最低気温10℃以上、最低地温15℃以上になったことです。一般地の露地栽培では5月上中旬ごろ、トンネル栽培では4月中下旬ごろになります。老化苗定植や定植後の環境不良などで、生育が悪い場合には液肥や葉面散布などで草勢回復に努めます。



定植した苗

生育適温
昼間25~28℃
夜間13℃

キュウリの根は酸素要求量が多いのでうねを高くするとよいでしょう。



施肥量

元肥の量は目安として10㎡当たり成分量で、チッソ200~250g、リン酸200~250g、カリ100~150gを施用します。元肥が多すぎると、収穫初期の果実が短くクサビ状の尻細り果になることが多くあるので注意します。

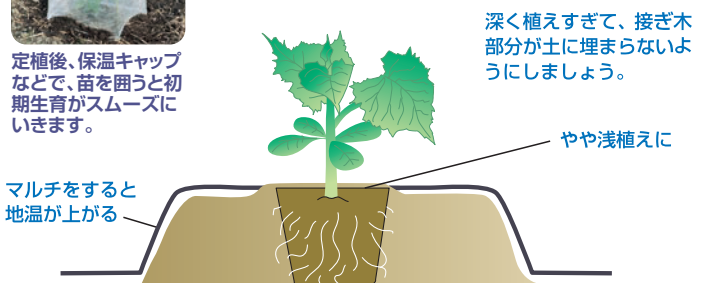
定植のポイント

活着の良否がその後の生育に大きな影響を及ぼすので、定植は晴天の午前中に行います。あらかじめ鉢に十分灌水しておき、植え穴にもあらかじめたっぷりと灌水しておきます。水分と地温を確保するためにマルチを利用すると効果が高くなります。マルチングは植え付け7~10日前に行って、十分に地温を確保しておくこと定植後、苗の根の伸張がよくなります。



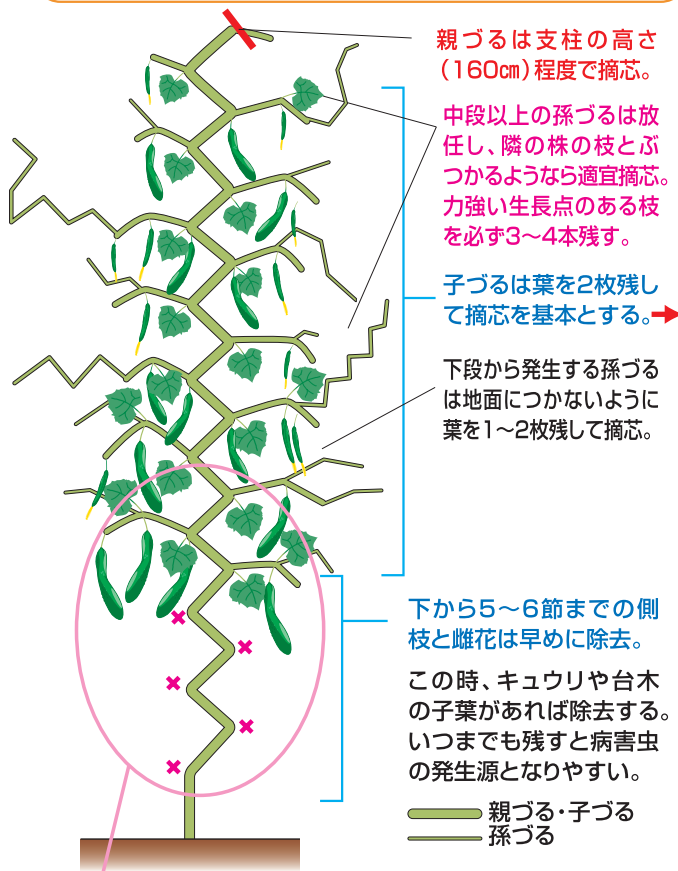
定植後、保温キャップなどで、苗を囲うと初期生育がスムーズにいきます。

5月中下旬から7月中旬にかけて育苗せずに畑に直まきして、簡単に栽培する方法もあります。



地温15℃を目標に定植しましょう

キュウリの整枝方法（基本的な例）

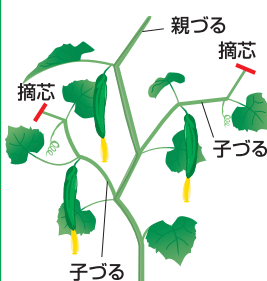


この部分が茂りすぎると病害発生や収穫忘れが多くなるので注意。スッキリ摘葉がイチバン！



↑ 株元から5～6節までの雌花、側枝を早めに除去。

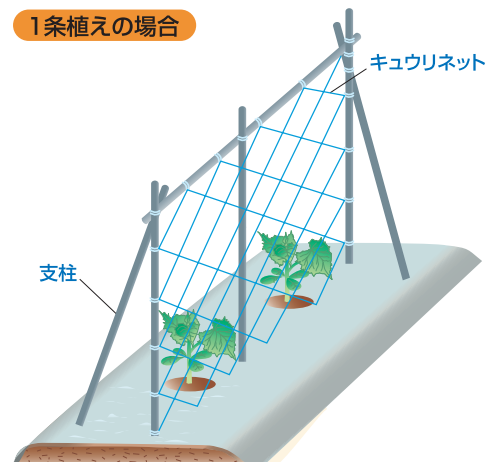
子づるは本葉2枚を残し、その先で摘芯する。子づるの1節目に着果する。



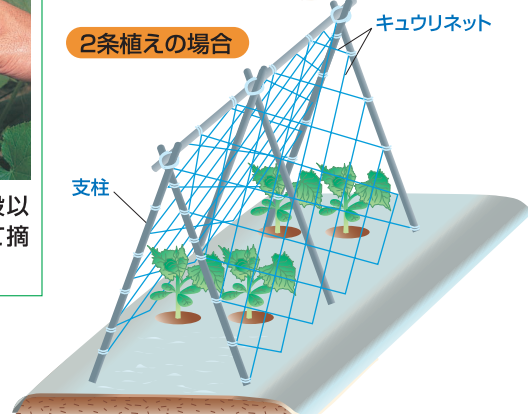
↑ キュウリの整枝。中段以降の子づるは2葉残して摘芯する。

誘引の例

1条植えの場合



2条植えの場合



追肥と灌水

●追肥

追肥は1本目の果実がとれ始めたところからが目安です。化成肥料の場合、1回にチッソ成分で10㎡当たり30g程度施します。間隔は7～10日が目安です。

液肥の場合は10㎡当たりチッソ成分で10～15gとして3～4日に1回程度施してください。アミノ酸含有の有機液肥などを施用すると味のよいおいしいキュウリが収穫できます。

●灌水

キュウリは特に水分を必要とする作物なので、安定した栽培のために雨水だけに頼るのではなく、灌水が必要不可欠です。梅雨明け後は高温乾燥により急速に草勢が衰えるので、通路灌水も含めこまめな水管理が大切です。

草勢判断のポイント

キュウリは初期生育が順調に行くことが大切です！

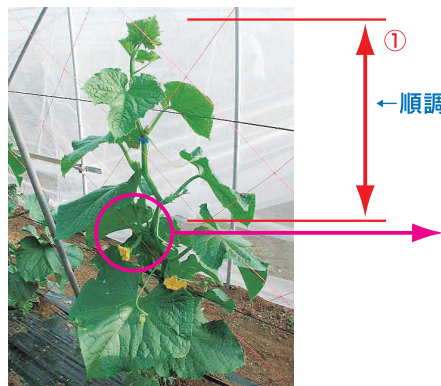
草勢判断は本葉15～18枚程度（8～10節の開花ごろ）に行います。順調な草勢であれば、生長点（芯）が大きく包まれており、生き生きしています。

①開花節から生長点までに、展開葉が5～6枚あれば順調。それ以下なら弱い。

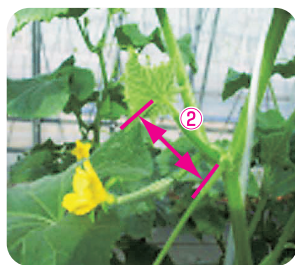
②開花節から発生している側枝の長さが小指以上なら順調。それ以下なら弱い。

上記2点を満たしても、発生している側枝が急に小さくなっているようなら、草勢は弱くなりつつあるので注意しましょう。

このような場合には、着果節位を1～2節上げる、力枝（側枝を2～3本）を伸ばすなどで対応するとよいでしょう。



← 順調に草勢を維持している株 ↓



収穫と不良果

収穫の適期は果実の長さが約20cm程度の時ですが、14～15cmのミニサイズで収穫すると、ふだんとはまた違った食味が味わえます。反対に大きくなりすぎると皮が硬くなり生食には向かなくなります。

気候や風害などの要因で果形の乱れ（尻細り果、曲がり果）が発生した場合は、思い切って不良果を摘果して草勢の回復を図ります。株が疲れた場合には根の活力剤（メネデルなど）や葉面散布剤の施用が効果的です。

不良果（曲がり果）の例



曲がり果は、サイズが小さくても曲がっている。

同じサイズの正常果。